

高校日本史では「女性」をいかに教えているのか？

— 近現代史学習のなかで —

河 西 秀 哉

Depiction of Women in History Taught in Japanese High Schools:

The Study of Modern History

KAWANISHI Hideya

要 旨

本稿は、高校の日本史の授業で、女性に関する歴史がどのように教えられているのかを検討するものである。2009年3月に改正された新しい学習指導要領に基づいて作成された日本史Bの教科書8冊を検討し、その中で女性の問題がどのように取り上げられているのかを明らかにした。本稿では特に、近現代史をその検討対象としている。

男性に比べて、女性の人物は教科書で取り上げられることも少ない。また、取り上げられる女性も特定の人物に集中している。女性に関する記述は、曖昧な部分も少なくない。

こうした現状に対して、女性史・ジェンダー史の研究成果を踏まえた教科書叙述の必要性を主張した。一方で、ただ女性に関する教科書の記述を多くすればよいものではない。多様な性の、多様なあり方を取り上げることで、今を生きることを生徒に考えさせる歴史叙述のあり方についても論じた。

キーワード：高等学校、日本史、近現代史、女性、ジェンダー

Summary

This paper considers how history relating to women is taught in Japanese high schools. Based on my examination of eight textbooks that were created along the newly revised (March 2009) curriculum guidelines, I show how women's issues are covered. In particular, this paper focuses on modern history.

Fewer women than men are covered in the textbooks. Primarily, only a specific group of female figures is considered. Further, there are more than a few ambiguous parts in the passages relating to women.

I argue that it is necessary to write textbooks that depict the research accomplishments of women in history. However, textbook passages on women should not simply be increased. I discuss history writing that, by covering the diverse forms of diverse sexualities take, makes students think about living in the present.

Keywords: High School, Japanese History, Modern History, Women, Gender

はじめに

本稿は、高等学校の日本史の授業で、女性に関する歴史がどのように教えられているのかを検討するものである。歴史教育者協議会（歴史研究者と歴史教育者とが提携し協力するために設立された機関）が編集した『学びあう女と男の日本史』（青木書店、2001年）の「はじめに」には、次のような言葉が書かれている。

「歴史」ということばは、積み重ねられてきた無数の事実（「歴」）と、それらをふるいにかけ書物に記した「史」が組み合わせられたことばであるといわれる。「歴」を形づくっていきながら「史」たりえなかった多くの女性たちの姿をあきらかにする女性史研究は、近年大きな進歩を遂げてきた。しかし、これまでの歴史教育をふりかえてみると、教科書には女性の名前はわずかししか登場せず、実際の授業においても、無意識のうちに女性の存在を見落とした歴史学習がおこなわれる場合が多かった。歴史教育において、女性の歴史に学ぶ必要はないだろうか¹⁾。

人間は男性と女性という2つの性から構成される。しかし、これまでは政治史的な観点に注目が集まり、政治社会の中で中心的に活動してきた男性のみに焦点を当てて歴史が語られてきた。それに対する批判としてなされてきたのが、女性史研究である。上記の引用にもあるように、これまでの男性中心史観を打破することを目指し、男性中心の社会で闘ってきた女性、またはその中で抑圧されてきた女性の歴史を女性史は描いてきた。また、社会的文化的な性のあり方が歴史的にどのように形成されてきたかを検討するジェンダー史からも、多くの研究が生み出されてきた。ところが、2001年当時の歴史教育の場では、上記のようにその研究成果が活かされず歴史教育者協議会編集の著作の中で、「無意識のうちに女性の存在を見落とした歴史学習がおこなわれ」ていると厳しい評価がなされている。

では、ここで論じられてきた状況が、2014年現在どのように変化したのだろうか。2001年からすでに10数年を経、女性史研究およびジェンダー史研究はその後も着実に成果が積み上げられている²⁾。こうした豊かな研究成果を踏まえ、高等学校の歴史の現場ではいかに「女性」が教えられているのか。本稿では、2009年3月に改正された新しい「学習指導要領」に基づいて作成された日本史Bの教科書8冊について、特に近現代史（幕末以降）を中心に検討³⁾し、その中で女性の問題がどのように取り上げられているのかを明らかにする。日本史Bとは、古代から近現代まで全体を通史的に教える科目である（4単位）。本来であれば、近現代史に特化した形で教えられる日本史A（2単位）の教科書も対象とする必要がある⁴⁾が、本稿では大学受験で利用されて多くの高校生が学ぶ日本史Bの教科書を検討することで、多くの生徒が学ぶ歴史像の解明に努めたい⁵⁾。

1 女性の人物はどのくらい登場するのか

「はじめに」冒頭で取り上げた『学びあう女と男の日本史』の中では、「教科書には女性の名前はわずかししか登場せず」と述べられている。ここではまず、現在の教科書がどの程度女性の人物を登場させているのか確認しておきたい。それが次に掲げた表である。本文に取り上げられているだけではなく、注や図表などにその名前が記載されている人物もピックアップした。

この中では、全部で31人の女性が日本史Bの教科書で取り上げられている。たしかに、どの教科書も男性の人物の方が数多く取り上げられており、それに比べて女性は少ない。このうち、すべての教科書に登場するのは、市川房枝、和宮、平塚らいてう、与謝野晶子の4人である。近年の教科書はかなり工夫が凝らされ、多様な観点や事実を論じていて、これまででは取り上げられることもなかった人物が登場しているケースもある。ただし、女性は上記の4人を中心にやや特定の人物に集中しているようにも思われる。

さて、すべての教科書に登場する4人の女性はどのようにその中で記述されているのか。まず、政治・社会関係の人物から見ておきたい。幕末の皇女・和宮は、江戸幕府と朝廷の公武合体政策の一環として将軍徳川家茂と結婚した事実が、どの教科書でも取り上げられている。和宮の降嫁は幕末政治史の一つの重要な出来事として認識されており、女性史・ジェンダー史研究の成果が教科書に盛り込まれたというより（もちろんその意味もないことはないが）も、公武合体という政治史の観点から論述されていると言える。

平塚らいてうは「家庭の束縛から積極的に脱しようとする女性」として、「1911年に結成された青鞥社に集う人々」（実教『日本史B』285ページ）の代表的人物として描かれている。青鞥社に関する教科書記述は多い。その平塚とともに1920年に新婦人協会を設立した市川房枝は、「参政権の要求など女性の地位を高める運動を進めた」（山川『詳説日本史』330～331ページ）人物として言及される。平塚・市川は大正デモクラシー期において女性の解放を求めた代表的な運動家として取り上げられており、その記述はどの教科書も比較的似通っている。平塚・市川は、女性史研究において積極的に研究が重さねられており⁶⁾、女性運動家として人口に膾炙した人物と言える。

一方で市川は、「戦争と女性」の関わりでも言及されている。「1920年代から女性の参政権を求めて活動してきた婦選獲得同盟は、大政翼賛会結成とともに解散した。指導者の市川房枝は、国策への協力が女性の社会的地位を向上させるとして、新体制運動に加わっていった」（実教『高校日本史B』211ページ）。このように、市川が戦争に協力することで女性の地位を向上させようとした事実が描き出される⁷⁾教科書もある。この問題については後述したい。

文化関係の人物では、清水『高等学校日本史B』以外が取り上げている樋口一葉はその扱い方が注目される。彼女は近代文学が成立し発達した歴史の中で取り上げられている。ただし、「活躍した」（東書『新選日本史B』196ページ）というごく簡単な記述で、ほかに代表作の『たけくらべ』が紹介される程度にとどまる。つまり、このように教科書の中でごく簡単にしか取り上げられない女性は多い。

それに比べ、与謝野晶子に関しては記述がかなり詳しい。1904年の日露戦争開戦後、「君死

表 高等学校日本史 B の教科書の中の女性

	『最新日本史』 (明成社)	『新日本史』 (山川出版社)	『高等学校日本史 B』 (清水書院)	『日本史 B』 (実教出版)	『高校日本史』 (山川出版社)	『高校日本史 B』 (実教出版)	『新選日本史 B』 (東京書籍)	『詳説日本史』 (山川出版社)
有吉佐和子						●		
池田理代子						●		
イザベラ・バード	●							
石牟礼道子						●		
市川房枝	●	●	●	●	●	●	●	●
伊藤野枝			●	●	●	●		●
大塚楠緒子			●					
奥むめお			●	●				
景山(福田)英子	●	●	●	●	●	●		●
和宮	●	●	●	●	●	●	●	●
岸田俊子			●			●		
楠瀬喜多			●					
サッチャー	●		●					
昭憲皇太后	●							
津田梅子	●	●	●	●	●	●	●	●
中山みき	●	●	●	●	●	●		●
並木路子			●	●	●	●		●
長谷川町子				●	●	●		●
樋口一葉	●	●	●	●	●	●	●	●
平塚らいてう	●	●	●	●	●	●	●	●
松井須磨子				●	●	●		●
三浦環				●	●	●		●
美空ひばり	●	●	●	●	●	●	●	●
美智子皇后								●
宮本百合子			●					
関妃	●		●	●	●	●	●	●
山川菊江	●		●					
山川捨松	●							
山口シヅエ			●					
柳寛順			●					
与謝野晶子	●	●	●	●	●	●	●	●

にたまふことなかれ」とうたう反戦歌を『明星』に発表したことはどの教科書でも紹介されている。これは、日露戦争前後の社会状況を端的に示す一例として取り上げられているのではないだろうか。つまり、和宮と同様に政治社会史の中での取り扱いと言えるだろう。また、文学者としては樋口一葉同様に、近代文学の発達の歴史の中で、その作風がロマン主義的だったことが言及されている。

また与謝野については、実教『高校日本史 B』と実教『日本史 B』が平塚らいてうとの母性保護論争を取り上げており、注目される。母性保護論争は1918年から平塚と与謝野を中心に展開された論争で、女性の自立のためには国家による母性保護が必要とする平塚と、国家から距離を保って女性の経済的自立の必要性を説いた与謝野らによる論争である⁸⁾。実教『高校日本史 B』はこの論争を「歴史のまど」としてコラム的に取り上げ、「保護か自立かという、現在にもつながるこの重要な問題提起を、いま、どう受けとめればいいのか」(194ページ)と生徒に問いかける記述をしている。これは、歴史的事実から現代の問題を考えさせる取り上げ方であり、歴史学習と現在を往還させる試みとして評価したい⁹⁾。実教『日本史 B』は本文の中で母性保護論争を取り上げ、「そして彼女らの一部は積極的に政治運動を展開し」、新婦人協会の結成へと向かったと記述している(286ページ)。大正期の女性解放運動の展開の中で母性保護論争に言及することで、新婦人協会がなぜ結成されたのかという契機を説明することにつながった叙述と言えるだろう。

この他にも、幕末に天理教をおこした中山みき、明治期に岩倉使節団とともに欧米に向かい後に女子英学塾を設立する津田梅子、アジア・太平洋戦争後の日本の大衆文化を代表する存在として美空ひばりなどが多くの教科書で取り上げられている。

また表からもわかるように、教科書ごとにも女性を多く取り上げるものとそうでないものととの差が大きい。例えば、東書『新選日本史 B』や山川『高校日本史』は他の教科書に比べて登場人物の数が少ないのは、そもそもこの2つの教科書が全体的に人物を取り上げることが少ないことも要因としてはある。ただしやはり女性の登場が少ない印象は否めない。山川『新日本史』は人物を多く取り上げているものの、女性の登場数は他の教科書と比較してもかなり少ない。この教科書からは、男性中心の歴史像が描かれている印象を受ける。

逆に、積極的に女性を取り上げている教科書が実教『高校日本史 B』と清水『高等学校日本史 B』である¹⁰⁾。実教『高校日本史 B』は17人の女性を取り上げているが、他の教科書では出てこない人物が数多く登場している。例えば、「朝鮮・アジアでの民族解放運動」というコラムの中で、植民地朝鮮において独立運動をおこして虐殺された少女柳寛順ユグァンスンとそのレリーフについて紹介している(203ページ、写真付き)。彼女の存在を通して、日本の植民地支配の実態を説明しようとするのである。また、戦後の文化の項目において、主な作家と作品の中に吉佐和子(『華岡清州の妻』)と石牟礼道子(『苦界浄土 わが水俣病』)を取り上げている(239ページ)。名前と作品名だけではあるが、戦後において女性の作家が活躍したことを示しているのは実教『高校日本史 B』のみであり、その姿勢は評価できるのではないだろうか。

また、清水『高等学校日本史 B』も、日露戦争の非戦論を唱えた人物として大塚楠緒子、敗戦後初の女性代議士として山口シヅエなど、他の教科書に取り上げられていない人物が登場し

ており、後述するように女性に配慮した記述が数多く見られる。

2 女性はどうに記述されているのか

次に、女性に関する記述が実際にどのようなものであるのかを見てみたい。

まず明治期から。自由民権運動の中で、景山（福田）英子もその活動に加わっていたこと、大阪事件で検挙されたことを叙述している教科書はいくつかある（実教『日本史 B』246ページ、山川『新日本史』247ページ）。ただし、彼女がなぜ自由民権運動に加わったのか、その中で何を訴えたのかは書かれていない。

ただし実教『高校日本史 B』は、「民権運動には、岸田俊子、景山英子らの女性も加わり、男女同権などを訴えた」（165ページ）と記している。こうした記述は重要ではないだろうか。その理由は第一に、その後明治政府が民法を制定し「家制度」を構築しようとする中で、それに抵抗ないしは反発するような動きが女性の中にあったことを示す事例だからである。第二に、大正期の女性の解放を目指す市川・平塚らの動きが、こうした自由民権運動の中での女性たちを前提としてしていると捉えることができるからである¹¹⁾。実教『高校日本史 B』の記述は歴史を多面的かつ流れの中でとらえ、その過程から女性の問題を生徒に考えさせる記述となるのではないか。

また清水『高等学校日本史 B』は、「岸田（のち中島）俊子や景山（のち福田）英子のように、自由民権運動に参加する女性もあらわれ、各地に女性の結社も生まれた」（170ページ）として、女性による自由民権運動の動きを記述し、「民権ばあさん」と呼ばれた楠瀬喜多を紹介している。この記述も、実教『高校日本史 B』の問題意識と通底するものがあるだろう。

このように、実教『高校日本史 B』や清水『高等学校日本史 B』以外で景山や岸田のような動きがあまり取り上げられず、同時期の津田梅子の留学と学校設立が数多く取り上げられている現状は、やや問題があるのではないだろうか。白石玲子が『新しい歴史教科書』の問題で指摘したように、津田梅子を取り上げることで教科書は「女性が輝いた明治」を強調することになる¹²⁾。津田のように海外へ出た後に学校を設立して女子教育を担い活躍した女性がいたことのみを記述すると、女性にとって「輝いた明治」だったと認識してしまう生徒が出てくる可能性はないだろうか。もちろん、どの教科書でも明治民法は戸主の権限が強いことが強調されている。しかし、戸主のほとんどが男性であることは教科書には書かれていない。景山や岸田のように男女同権を求めた動きがあったことを一方で言及することで、津田とは異なる明治の女性のあり方を生徒に提示することにつながるのではないだろうか¹³⁾。

その意味で、清水『高等学校日本史 B』が「異国に眠る女性たち—からゆきさん—」とのコラムを掲載している（184ページ）ことも高く評価できるものと考ええる。帝国日本の「発展」の中で、「からゆきさん」と呼ばれる女性たちがいたことの意味を問うたこのコラムは、近代日本が「輝いた」女性だけではないことを生徒に提示し、彼女たちの存在から近代日本社会とは何であったのかを問うているのではないだろうか。

次に大正期について。これは前述したように、平塚・市川らの新婦人協会設立がどの教科書にも言及されている。加えて、「山川菊栄・伊藤野枝らは赤瀾会を結成し、社会主義の立場か

らの女性運動を展開した」(山川『詳説日本史』331ページ)というように、社会主義の立場から山川・伊藤らが女性運動を同時期に展開したことに言及する教科書もある。山川『詳説日本史』は注での記載であるが、実教『日本史 B』は本文の中で「社会主義者山川菊栄らは、その動き〔河西注：平塚・市川らの動き〕とは別に赤瀾会を組織した」(286ページ)と取り上げている。山川『詳説日本史』や実教『日本史 B』の記述は、大正期の女性解放の運動には平塚・市川とは別の動向(社会主義者)からのアプローチがあり、多様であったことを示していると言える。

大正期には、社会や文化の項目でも女性に関する記述はある。職業婦人と呼ばれる女性が登場し増加したことなどは、どの教科書でも言及されている。また、モダンガール(モガ)についても言及される教科書も多い。ただしその叙述は様々である。山川『詳説日本史』は「アメリカのシネモード=スタイルそのままのモガ」(334ページ)と説明し「モガが行く」とのキャプションが付いた写真を、実教『日本史 B』で「繁華街には『モボ』や『モガ』が闊歩し」(282ページ)と記述して「ワンピース姿のモガ」とのキャプションが付いた写真を掲載、山川『新日本史』は「当時流行したスタイルで、モガ(モダンガール)と呼ばれた」(306ページ)と説明する写真を掲載している。ビジュアルに特徴のある彼女たちは、視覚的な効果の高い写真によって生徒に理解されるようになっている。しかしこれでは、モダンガールとは結局どのような女性で、なぜ登場したのかはあいまいである。彼女たちの思想的背景がはっきりしないとも言える。これは、研究においてモガに明確な定義がなされていないことも要因だろうか¹⁴⁾。

最後に昭和期について。前述したように、実教『高校日本史 B』211ページには「戦争と女性」という項目がたてられ、女性が戦争に協力していく・総力戦体制の中に入っていく姿が言及されているのは特徴的である。近年の研究成果を踏まえ、女性が主体的に戦争に取り組んだ様子を描き出すことで、女性の立場を踏まえて、戦争へと向かっていく当時の日本社会の特徴を生徒に伝えようとしている。戦時中については、他の教科書でも必ず「女子挺身隊に編成した女性を軍需工場などで働かせた」(山川『詳説日本史』365ページ)というように、女性が勤労働員された状況への記述がなされている。また、「慰安婦として戦地に送られた植民地や占領地の女性も少なくなかった」(東書『新選日本史 B』222ページ)と、いわゆる「従軍慰安婦」についても多くの教科書で言及されている。女性も含めて戦争の時代を見る視点は高校日本史の教科書の中にはある。

一方、戦後に関する記述はやや少ない。女性議員の誕生、憲法・民法改正に伴う男女同権の問題には必ず言及しつつも、占領期以降の女性の問題に関する記述はかなり乏しくなる。例えば、「専業主婦」化が高度経済成長期により強化されたこと、ウーマンリブの動きがあったことなどに言及する教科書はなく、戦後史記述は今後の課題と言える。清水『高等学校日本史 B』が「戦後の女性運動」「戦争はいやだ」母の叫び」と題するコラムの中で、戦後の母親運動について取り上げており(256ページ)、こうした言及が各教科書に広がることを今後期待したい。

おわりに

以上、高等学校日本史 B の教科書叙述の中での女性像について検討してきた。最後に、こ

れまでの分析を踏まえて若干の考察を行っていききたい。教科書の中に登場する女性は、男性に比べて数は少ない。また、近年はその傾向がやや和らぎ多様化しつつあるとはいえ、特定の人物に集中して取り上げられている。そして最も問題なのは、取り上げ方が曖昧な部分も多く、女性に関する記述は「点描」ととどまっている点である。つまり教科書は男性中心の叙述で、女性はその中でのエピソードとして紹介されていることにある。言い換えれば、近現代史を通じての女性の歩みが通史的に生徒に理解されるような教科書叙述にはなっていないのである¹⁵⁾。女性史やジェンダー史に関する通史が歴史研究の中で生み出される中で、こうした研究成果を教科書叙述に活かしていく工夫が今以上に求められる。

一方で、ただ女性に関する教科書の記述を多くすればよいものでもない。授業時間は限られており、その中で教えられる項目も吟味される必要があるだろう。歴史研究の成果をとにかく教科書に活かすというだけでは、教科書は無制限に分厚くなってしまい、生徒に過重な負担を強いることになる。

では、その中で女性の歴史を今まで以上に学び、男女の視点から見た歴史教育がなぜ必要なのか。横山百合子の整理¹⁶⁾に学ながら考えてみたい。第一に、平等・人権・平和の課題という観点である。現代社会を生きる私たちの諸問題が歴史的に形成されてきたことを学ぶという、歴史研究の意義がこの根底にある。「男女共同参画」が叫ばれつつ性別分業意識が根強い現在の日本社会はいかに形成されてきたのか¹⁷⁾。こうした現在の問題を見つめ、未来を構想するために性別の視点を踏まえた歴史を学ぶ必要がある。男性中心の歴史叙述だけではなく、女性の記述を組み込んだ多様な性の、多様なあり方を取り上げる¹⁸⁾ことで、今を生きることを生徒に考えさせる意味もあるのではないか。

第二に、子どもの成長という観点である。生命を生み育てていく男女・親子・家族関係などと政治経済社会との関わりを学ぶことで、子どもの成長にとって糧になると横山は主張する。こうした観点も、歴史が現代の問題を考え、未来を構想するという意識に基づくものであろう。自己の生活の身近な単位である家族、という点を意識させる上でも、女性の視点を組み込んだ歴史叙述が必要ではないだろうか。

第三に、通史学習を深める立場という観点である。生徒が一つの時代を男性の観点だけではなく、様々な角度からとらえ、その連関を見つけるために女性の視点を組み込んだ教科書の記述が求められているだろう。これは、現在のようにコラム形式で取り上げられる女性記述では不十分である。女性に関する歴史を通史的に教科書で理解できる叙述が、今後なされるべきではないだろうか。

注記

- 1) 歴史教育者協議会編『学びあう女と男の日本史』（青木書店、2001年、iii ページ）。
- 2) 例えば、義江明子『日本古代女性史論』（吉川弘文館、2007年）、永原和子『近現代女性史論』（吉川弘文館、2012年）、鹿野政直『現代日本女性史』（有斐閣、2004年）大口勇次郎・成田龍一・服藤早苗編『新体系日本史 9 ジェンダー史』（山川出版社、2014年）、阿部恒久・大日方純夫・天野正子編『男性史 1・2・3』（日本経済評論社、2006年）など。
- 3) 使用する教科書は、『詳説日本史』（山川出版社）、『新選日本史 B』（東京書籍）、『高校日本史 B』（実

教出版)、『高校日本史』(山川出版社)、『日本史 B』(実教出版)、『新日本史』(山川出版社)、『最新日本史』(明成社)である。本稿では、教科書を引用するときは本文中にそのページ数などを入れ込み、山川『詳説日本史』、東書『新選日本史 B』など教科書会社がすぐにわかるような形で注記した。

- 4) 日本史 A の教科書は近現代史に特化している分、日本史 B よりも記述がそれぞれの教科書ごとにバラエティーに富んでいて、かなりユニークな記述で書かれている教科書も目立つ。その中での女性像の描き方についても今後の検討課題としたい。
- 5) これまでも高等学校の日本史の中での女性の問題を論じた研究はある。まず、近現代日本の歴史を学習する中で、いかに女性について教えたか／教えたらいのかを論じた優れた授業実践の論文が挙げられる(例えば、宇野勝子「近代日本のはじまりと女性」『歴史地理教育』631号、2001年、富永信哉「『万世一系』憲法下の女性」『歴史地理教育』713号、2007年)。これらの論文では、女性史・家族史的な観点を盛り込みながら、近代日本の女性の姿や家族のあり様を教え、生徒に現在の問題を考えさせようとする意図が見られる授業の様子が紹介されている。また、教科書や用語集に見られる女性像を検討する研究もある(例えば、横山百合子「教科書にみる女性史と歴史教育」『歴史地理教育』588号、1998年、林恒子「高校日本史教科書の中の女性史」『総合女性史研究』20号、2003年、久留島典子「高等学校日本史教科書にみるジェンダー」『学術の動向』2010年5月号)。これらの研究では、教科書の中の女性像の特徴が論じられている。本稿もこれらの研究をさらに深める立場にある。その他に、扶桑社が発行した『新しい歴史教科書』における女性像の問題を指摘した白石玲子「ジェンダー・近現代女性史の視点から問う」(『歴史地理教育』661号、2003年)や総合的に女性史研究の成果と歴史教育とのあり方を論じた阿部恒久「女性史を日本近現代史にどう位置づけるか」(『歴史地理教育』631号、2001年)などが重要な研究成果である。
- 6) 例えば、菅原和子『市川房枝と婦人参政権獲得運動』(世織書房、2002年)、米田佐代子『平塚らいてう 近代日本のデモクラシーとジェンダー』(吉川弘文館、2002年)など。
- 7) こうした観点からの近年の優れた研究として、進藤久美子『市川房枝と「大東亜戦争」』(法政大学出版局、2014年)がある。
- 8) 母性保護論争については、香内信子「『母性保護論争』の歴史的意義」(総合女性史研究会編『日本女性史論集』吉川弘文館、1998年)などを参照のこと。
- 9) こうした観点については、河西秀哉「歴史—未来を選択するために過去を認識する」(神戸女学院大学文学部総合文化学科監修、大橋完太郎編『日常を拓く知 1 知る・学ぶ』世界思想社、2013年)の中で論じた。
- 10) なお、明成『最新日本史』も他の教科書とは異なる女性を取り上げていて特徴的である。保守的な歴史像を目指した教科書であり、昭憲皇太后や美智子皇后などの皇族を絵や写真付きで取り上げている。
- 11) 河西秀哉「近代以降、女性天皇はなぜ排除されたのか」(『歴史読本』第57巻第7号、2012年)でも示したことがあるが、自由民権運動に取り組んだ男性民権家の中には、自らの権利は政府に求めつつ、女性の権利については男性より低く見ている者もいた。こうした自由民権運動の特質を考える上でも、女性の権利を求めた女性民権家がいたことに言及する必要があるのではないか。
- 12) 白石前掲「ジェンダー・近現代女性史の視点から問う」76～77ページ。
- 13) 明治期では他に、工業化の中で農家の女性などが紡績工場や製糸工場に男性労働者よりも安い賃金で働いていたことがどの教科書でも言及されている。こうした記述については、林恒子が「『哀史』的傾向から脱していない」と批判している(林前掲「高校日本史教科書の中の女性史」106ページ)。
- 14) その意味で、清水『高等学校日本史 B』が「女性にみる装いの変化」と題する短いコラムを掲載していることは注目に値する(246ページ)。この中では、明治期の和服から次第に洋服が広がり定着していく過程に言及し、こうした服装の変化の「背景には、旧来からの美意識、ジェンダーなどの相克があるように思われる」と述べている。単なる外見的变化ではなく、そこに思想の変化を読み取っているのである。
- 15) 阿部前掲「女性史を日本近現代史にどう位置づけるか」32ページ。
- 16) 横山前掲「教科書にみる女性史と歴史教育」24～27ページ。
- 17) 宇野前掲「近代日本のはじまりと女性」22ページ、林前掲「高校日本史教科書の中の女性史」107ページ。

ジ。

- 18) その意味では、女性だけではなく、クィアやトランスジェンダーの問題も歴史教科書の叙述に組み込む必要があるだろう。その点の考察は今後の課題としたい。

(原稿受理日 2014年9月22日)